町民参加の町史づくり

# 竹富町史だより

2007・9・28
第29号

竹富町役場

沖縄県石垣市美崎町１１番地
TEL（０９８０）８２－６１９１

# 目次

『竹富町史』第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」発刊 …… 1
第22回竹富町史編集委員会 …… 2
《写真にみるわが町》27
祖納集落の脱穀光景 …… 3
《聖地めぐり》25
喜屋武御嶽 …… 4
《文化財探訪》22
大平井戸 …… 5
《史料紹介》
東京人類学会報告第十三号（明治二〇年二月刊）所収
沖縄県武富島歴見奇事 …… 6
《史料紹介》
『官報』掲載八重山関係資料 ③ …… 8
《報告》
「ミーナライ・シキナライ」会のこと …… 15
収蔵図書紹介 …… 18
業務日誌 …… 19
竹富町史の刊行物 …… 22
編集後記 …… 25

●表紙の写真●

勢揃いした鳩間島の神司とティジリビたちである。同島には友利、新川、西堂、ヒナイ、前泊の五ケ所の御嶽がある。そのなかで、祭祀の中心となるのは友利御嶽である。御嶽では豊年祭の時に農作物等の豊穣、無病息災などの祈願が行われ、結願祭には舞踊、狂言等が奉納される。写真は友利御嶽。御嶽の拝殿改築前に撮られたもので、前列に神司、後列にはティジリビが並ぶ。神司は白装束をまとい、吉川のぶ子（前泊）、加治工トシ（新川）、花城イカ（ヒナイ）、加治工チヨ（友利）、脇神司は松竹とも子、仲伊部シズの面々である。

☆題字　大　城　正　明

# 『竹富町史』第十巻資料編「近代4～官報にみる八重山」発刊

## ―「官報」の中から八重山関係の記事を収録―

明治・大正・昭和戦前の八重山に関する「官報」の記事を収録した『竹富町史』第十巻資料編「近代4―官報みる八重山」を、平成十八年度事業として発刊しました。本巻は、平成十七年度に刊行した「近代3―新城村頭の日誌」に次ぐ近代史料集で、第十巻資料編としては四冊目になります。

発刊した第十巻資料編「近代4」

『官報』は「法令・条約・予算・省令・規則・告示・国会事項・人事・叙任など国の機関としての諸報告や資料を、国が一般国民に知らせるために発行する日刊機関紙で〝国の広報紙〟〝国民の広告紙〟としての使命のほか、法令に基づく各種の公告を掲載するなど、国が発行する機関紙として極めて重要な役割をもっている」といわれます。一八八三年（明治一六）七月二日に創刊され、現在まで日刊紙として発行されています。

掲載事項は、戦前と戦後では大きく異なります。本巻には明治から昭和戦前期の記事を収録したことから、標題は「勅令」「省令」「訓令」「告示」「法律」「議会」「叙任及辞令」「彙報（官庁事項・陸海軍・学事・衛生・通運・統計など）」等が付いています。戦後は「憲法改正」「詔書」「法律」「政令」「条約」「府令・省令」「規則」「庁令」等の標題が付されています。

編集の仕方は明治から終戦（昭和二十年八月十五日）までの時代の流れを、①歳元・旧慣温存期（一〇五件）、②八重山島庁期（七四六件）、③八重山村期（一二二件）、④特別町村制期（一六八件）、⑤普通町村制期（六二六件）、⑥戦時期（一六五件）の六つの時期に区分し、そのなかで、前記の標題を主題に時系列で記事を配列する方法をとりました。収録した記事は、全部で一九三二件にのぼります。

記事は「鉱業事項」の項目で、鉱業権を有する企業等が石炭、金・銀・銅・硫化鉄などを採掘するために行政機関に試掘願いを出すもの、「広告」の項目では、神戸、沖縄本島、八重山、台湾行きの大阪商船㈱の汽船出発表、企業の設立・解散、島ごとの漁協の設立など、近代八重山を知る貴重な記事ばかりです。なかでも鉱物の試掘・採掘申請は厖大な数です。

『竹富町史』は、本巻と、先に明治二十六年から昭和二十年までの記事を取り扱い発刊した「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の実相が一段と浮かび上がってきます。

# 第22回竹富町史編集委員会

## ―委員15人に委嘱状を交付―

竹富町史編集委員会の任期満了（二年間）に伴う委員への委嘱状交付式並びに第二十二回町史編集委員会が二月十七日、町役場二階議会委員会室で開かれました。委嘱状交付式では大盛武町長から委員十五人の一人ひとりに委嘱状が手渡されました。任期は平成二十一年一月三十一日までです。

大盛町長は委嘱状を交付した後、「編集委員は前回と同じメンバーで尽力いただくことになります。温故知新という言葉を認識し、今後ともお力添えをお願いいたします。行革・地方の時代の波が寄せていますが、本町は工夫を凝らせながら地固めをしていきます。町史編集については機能を改善・拡充し、町の歴史を継承しながら、今後も意向に添う編集を確実に確保していきます。」とあいさつし、各委員に協力を求めました。

編集委員会では編集委員長に登野原武氏を互選、西里喜行氏を指名したのち議案の審議に入りました。今回の議案は①第十巻資料編近代4「官報にみる八重山」の編集の進捗状況について、②第二巻～第八巻島じま編の編集について、③今後の編集計画について、の三件が提案され審議を重ねました。

第十巻資料編近代4は、明治十六年から昭和二十年までに発行された官報の中から、八重山関係の記事を検索して収録するものです。編集構成は①蔵元・旧慣温存期、②八重山島庁期、③八重山村期、④特別町村制期、⑤普通町村制期、⑥戦時期、の六つに時代区分し、その中で各項目ごとに時系列で記事を配列します。ただ、記事の題目は、第〇〇号と附され、一見して内容を把握することが難しいため、収録記事目次に記事を概括した見出しを入れること、さらにテーマごとの索引を付すことも確認しました。現在、印刷製本請負業者への入稿を終え、初校を行っている、と報告されました。本巻は年度内に刊行されました。

第二巻～第八巻島じま編は、当初、平成十九年度に竹富島編を皮切りに発刊の予定でしたが、予算および編集の進捗を踏まえ、十九年度には原稿執筆および編集、二十年度に発刊という二年間で刊行することを確認しました。委員会では各巻の部会長が編集の進捗状況を報告しました。

今後の発刊計画については、島じま編の中の項目「植物」「動物」をビジュアル化するため、別巻④生物図鑑（仮称）を、専門家を編集委員として発刊するとしました。

竹富町史編集委員会

◎印は委員長
〇印は副委員長

◎登野原　武　元竹富町教育委員会教育長
〇西里　喜行　琉球大学名誉教授
黒島　精耕　前竹富町教育委員会教育長
三木　健　前琉球新報社副社長
玉城　功一　元八重山商工高校教諭
石垣　久雄　元八重山高校校長
當山　善堂　元八重山支庁長
新本　光孝　琉球大学教授
阿佐伊孫良　ＮＰＯたきどぅん事務局長
上江洲儀正　南山舎代表者
里井　洋一　琉球大学教育学部教授
石垣　金星　西表をほりおこす会会長
吉川　安一　名桜大学国際学部教授
本田　昭正　元那覇高校教諭
玻座真　武　元白保中学校教諭

足踏み脱穀機を使っての脱穀作業

〈写真にみるわが町〉27

# 祖納集落の脱穀光景

西表島西部の祖納は、歴史的に古い集落である。『李朝実録』の「朝鮮済州島民漂流記」（一四七七年）には〝所乃是麼〟と記されている。八重山の歴史をみると、錦芳姓の始祖・慶来慶田城用緒、さらに英傑・大竹祖納堂儀佐を輩出した村で、それは『慶来慶田城由来記』『八重山島由来記』から窺い知ることができる。慶来慶田城用緒の屋敷跡、墓、大竹祖納堂にまつわる鍛冶遺跡、御嶽等が残っている。琉球王府時代には慶田城村、西表村の村番所があり、与人、目差が詰めていた。

西表島は米どころ、稲作が盛んな地域である。特に祖納、干立は米づくり一辺倒の農業で、祖納岳の周辺一帯および美田良地区には水田が広がる。二月は田植えの季節にあたり、農家にとっては繁忙の時期である。

八重山で稲作がいつから始まったかは明らかではない。「稲作があった」とする最も古い記録は、先に記した『李朝実録』である。同記は、朝鮮済州島民が与那国島に漂着し、西表（祖納）－波照間－新城－黒島－多良間－伊良部－沖縄本島を経て九州に至り帰国するまでの、各島で見聞したことを記す。西表の項目に「稲と粟とを用いるが、粟は稲の三分の一しかない。収穫した禾は近所の明地に積んで置くが、その高さは二丈ばかりである」との記述があることから、米作が行われていたことが分かる。

竹富島の民謡「イヤリ節」は、島々の特産物を歌い込んでいるが、西表島を「米ヌ島」と謡っている。祖納の古謡「稲が種アヨウ」は、稲穂が石のように硬く、金のような実をつけ世菓報をもたらすようになった、と稲の成長を謡う。稲作は今では田植えから収穫まで機械化されているが、かつてはすべて手作業だった。

〈聖地めぐり〉25

# 喜屋武御嶽

黒島にある御嶽。島では「ケンワン」で親しまれている。島の東海岸の近くに建つ。御嶽の由来は航海安全に深く関与し、〝海〟とのつながりを有する。

『黒島史』(知念政範著)によると、由来は以下のとおりである。「往昔宮古の役人でテフヌ主(若文子)職を務めていた者が公用で石垣島へ航行中、時化に遭い船は押し流されて目的地を離れて、ようやく黒島の東海岸に安着することができた。(中略)この宮古の若文子役人は滞在中、宮里村の浦崎家の女と恋仲になっていたので船が無事、宮古へ着くようにと彼等が残していった船のとも綱を岩石に結びつけて、それを神体として祈願し続けていた。その願いが叶って一行は無事に帰省したとの通報に接し、彼女はその後、その処を霊地として深く信仰し、以て旅御嶽として創建したとい う」とある。御嶽の由来については、『沖縄のノロの研究』(宮城栄昌著)にも同様の記述がある。

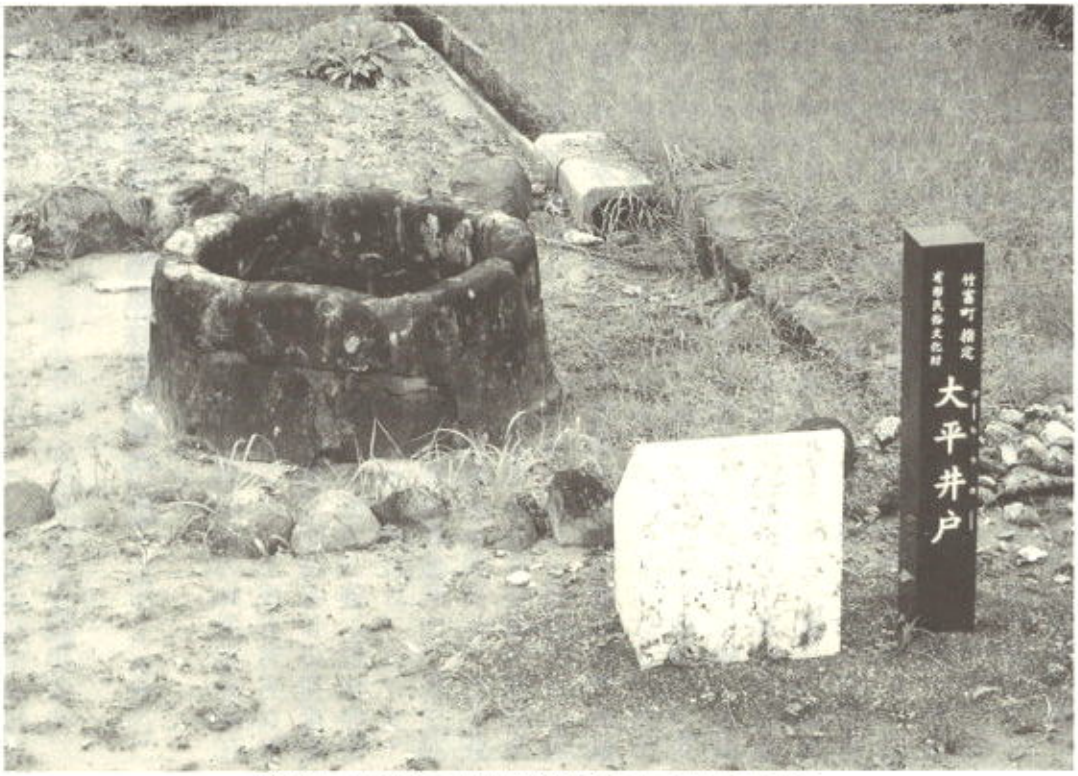
黒島の東海岸近くに建つ喜屋武御嶽

しかし、この見解とは異なり、沖縄本島最南端の地・糸満の喜屋武岬との関わりを指摘し、「喜屋武の神」と関係が深いとする考え方もある。いずれにせよ、海上安穏を祈願する旅御嶽の性格をもつ点では同じである。

『黒島史』によると、浦崎家の女子は喜屋武家に嫁いだので同家を宗家のトゥニムトゥとし、嶽名も屋号をもって「喜屋武御嶽」と称した。神司は代々、同家の者が世襲するようになったといわれる。トゥニムトゥは現在、新城家。それは喜屋武家が途絶えたことによると伝わる。神司の出自は新城家となっている。

『琉球国由来記』巻二十一をみると、黒島の御嶽は公事御嶽として八つある。そのため、島は八つの御嶽を「八嶽」と称し祭祀の中心地としている。由来記によると、神名は「エレキヤカヒ大嶽」、御イベ名は「イラビヲヘ」、場所は保里村とされている。由来記が編纂された一七一三年当時、多数あった島の村落は大きく、保里村と黒島村に統合されていたようである。

神行事はションガツニガイ、パチニガイ、豊年祭、結願祭、種子取祭など簡素化されている。このうち結願祭は子(ね)と午(うま)に行われる。古くは干ばつの時には「雨乞い」があり、井戸を巡回し降雨を祈願した。今では水に関わる行事に「水道の願い」がある。




「節祭」三日目の水恩感謝祭が行われる大平井戸

〈文化財探訪〉22

# 大平井戸

西表島西部の祖納集落にある古井戸。伝承によると、今から約五〇〇前、祖納集落が祖納半島の上村にあったころ、高台で水に不自由していた人々の苦労を解消するため、村の英傑・慶来慶田城用緒が掘削した、と言われている。

その後、井戸は飲料水を確保する場として集落の人々の生活を支え続けた。そのため、水恩に感謝する儀式が行われるようになった。「節祭」の三日目には旗頭を先頭に村びとが井戸に集い水恩感謝祭が挙行される。

感謝祭は公民館から大鉢（大皿）に豆腐、天ぷら、肉、昆布、パラピ等を山盛りした供物を井戸に供え、その中から「お初」を取り出し、線香を立てて参加者全員が合掌することから始まる。

井戸の周辺には長老や村びとが参列し、祝酒を酌み交わして宴に入る。そこで、「節祭」で演じた狂言、棒踊り、獅子舞の演技が繰り広げられる。特に獅子は井戸の周囲をぐるりと回り、井戸水を飲んだり、獅子頭を上げたりする仕草を何度か繰り返しながら演じる。獅子舞が終わると、男女が入り交じって『節アンガー』の合唱を繰り返し、「ガーリ」をして儀式が終了する。

「節祭」は年中行事のひとつで、節替わりの儀礼である。『琉球国由来記』巻21に記録がある。祭祀は、かつての大晦日から正月にかけての儀礼で、行わなくなった村もある。しかし、祖納・干立の両集落は、最も大きな行事と位置づけ、三日間行う。祭では海浜に旗頭が立ち、舟漕ぎ、棒技、獅子舞、ミリィク行列、アンガー踊り、狂言が行われる。

《史料紹介》

東京人類学会報告第十三号（明治二〇年二月刊）所収

# 沖縄県武富島歴見事奇事　S・S

明治十九年三月十三日、余、八重山島の内武富島滞在中、要事あり。払暁、海浜に出たるに、土民老若男女群れを為し、仮屋を作り其の内に箕踞し寂寞として声なし。皆、警粛する者の如し。傍に與人（仮名、蓋し中等の役員なり）及び其下役と覚しき者四五人居れり。

余が到るを見て、倉皇走り来て余の手を把り、問うて曰く、汝等何用ありて何の地に行かんとするか、と。余答うるに、要用ありて八重山に赴くを以てし併せて舟を出さん事ことを請う。

彼曰く、本日は旧例に依り当地人民悉く彼の如く海浜に出て五穀豊穣を祈るの日なるを以て、如何なる急用あるも村内を廻る事をも禁ず。況んや舟を出す事をや。若し他島より乗舟し来る者あるも上陸を許さず、出入り共に厳禁する所なり。但し、或は此の禁を犯す者有らんや慮り、東西南北の各地に三四人宛遠見番を派遣し、以斥候を為さしむ。又此事に就いて不服を唱え、不平を鳴す者あらば内外人を論ぜず村罪に処するの契約を為し、以て村則とす。故に出舟は断じて之を許さずと。是に於て余は、不得止宿所に帰らん事を告ぐ。

彼又之を許さず、出入厳禁の事を抗言す。然れども、正午を過れば乃ち出入り自在なりと云う。依てその言に従い、役員の側に就いて休憩し時の至るを待つ。既にして同行者の喫煙せんとするも許さず、食を欲するも亦許さず。蓋し此地の習俗、例年本月本日を以て豊年を祈るの日と為し、村人挙て黎明より此所に来り会し朝餐は固より茶煙草等凡そ飲食に類する者は之を厳禁し、黙然として官兵の十二時を報する時を待つのみ。

余輩、腹中空之を感ずるも飯食するを得ず、恰も渺々たる洋中に漂泊し、儺喝な艱なやむの想ありたりども為す所を知らず進退維谷り、或は村則を犯し如何なる憂苦を招くあらんかと戦々兢々として正午に至るを待つ。既にして十時なるべしと思う頃に、一役員蹶起大声を発して曰く、時まさに到れり速かに臥眠すべしと。村民悉く横臥す。復一人の起居する者を見ず。余輩、何の故なるを悟らず茫然として奇異の想いを為し、心中竊に笑を含み野蛮の風習を嘆息し居たりしが、役人余輩に命じて臥せしむ。因って此れに従い臥す。

殆ど一時間を経しと思う頃に、一老人走り来り役人に報ずるに既に鶏鳴東天紅なるを以てす。役員又之を衆に報じて曰く。東方既に白し宜しく速やかに起くべしと。衆人之を聴きて悉く拍手して起く。余輩も同じく起く。須臾にして遂に十二時を報じ、各人に飯食する事を許す。余輩是に至り始めて蘇生したるの想いを為し、午後一時寓所に帰り、本日心弄中の要事を達する事を得ざりし。武富島は八重山嶋を距ること大凡一里半許、八重山島の所轄なり。周囲大凡二里余土人凡て農耕を業とす。其の風俗たるや男子は那覇本島人に同じ。女子は結髪にて一

尺内外の銀釵かんざしを戴き筒袖襦袢の如き衣類を着し芭蕉布以て臀巻となし。其の上に白木綿の袴を着し、恰も西洋婦人の袴の如し。褶十五六もあるべし。而して性甚だ多淫なり。此の島男子少なく女子多し。故に一男にして妻妾四五人を有するを常とす。

此の地に一豪農あり。本年八十二歳にて其の子六十九人有りという。蓋し妻妾十五人を有すと六十九子ある復性しむに足らざるなり。又、一異習あり。此の地人民操舟（大木を刳り貫いて穿て之を製す。長さ四間或いは五間、幅三四尺之を操舟という。材料は松木を用ゆ）を以て数十里外の諸島に航す。

海上暴風雨等の天変に過ぎて数十日間帰島する事、能わざる者ある時は、村民一同海浜に集会し蒹葭竹木を結束して婦人の形を造り琉球芋の大なる者を股間に挟み以て陰部に擬す。此の寓人を海浜に植えて村民（戸主に限る）一同此の前に羅列し、順序に一人宛進み出て之を抱く事三回。一抱き毎に一唱あり。一に曰く「てんちよーくなってたもれ」（天気快晴を祈る）。二に曰く「あめやんでたもれ」（雨の止むのを祈る）。三に曰く「じゅんぷうなってたもれ」（順風たらんを祈る）。

此れ蓋し天に祈て雨師風伯を祭るの意なるか。未開野蛮の醜体見るに忍びざる者なり。

（※原文を読みやすくするために、カタカナを平仮名に改め、句読点を付した）

（阿佐伊孫良＝竹富町史編集委員）

【解説】ここに資料として掲載した『沖縄県武富島歴見奇事』は、明治二十年（一八八七）二月に発行された「東京人類学会報告第十三号」所収の一文です。昭和六十年（一九八五）に国立国会図書館に依頼してコピーしていただいたものです。活字はつぶれて読みづらい面もあるが、竹富島のことが初めて中央の学会に報告されたものとして注目してよいと思います。

報告者はS・Sと署名しているだけで誰かわからないのが残念です。わがふる里の、日本最南西端の僻遠の風俗習慣らしき行いを、中央の人士がいかにみていたかを知りうる資料と言えるだろう。この報告書は、許しがたいことに、未開地の野蛮なる振る舞いを醜態としてみるに忍びないという言葉で筆を置いています。

内容について吟味してみるに、まず物忌み（ムヌン）について書いており、S・S氏が竹富島に渡ったのは三月ことだから、おそらくウルズンムヌンという神事に当たったのでしょう。

現在では、竹富島には物忌み（ムヌン）という神事は行われていないから、ムヌンという神事が如何なるものであったかを知る参考にはなります。つづいて、女子の習俗について詳しく書き、多淫であり、一男に妻妾四、五人をもっていると断定し、ある八十二歳の老人は六十九人の子がいて、名前をつけるのに困っているという。

当時のことを調べてみたが、これはまさに針小棒大で、「白髪三千丈」がごときもの言いである。このように、予断と偏見でわが島の暮らしを見ているのにまったく驚かされる。

（阿佐伊孫良）

《史料紹介》

# 『官報』掲載八重山関係資料③

八重山群島風土病研究調査　②

○八重山群島風土病研究調査（昨十日ノ続）

第二患者月別表

第一表中ニ掲ケタル患者ニ就キ発病ノ年月極テ明瞭ナルモノノミヲ採収シテ此月別表ヲ製シタリ

吾等ノ目的ハ此表ニ拠リテ「八重山島ノ如キ気候ノ（殆ト）常ニ暖キカ或ハ暑キ地方ニ在リテ病毒ノ発生ハ四期共ニ著シキ盛衰ヲ現サヾルノ事実アルカ」或ハ「病毒カ一定ノ時期ニ於テ盛ニ発生スト云フトキハ此時期ハ各村ニ於テ多少ノ差異ナキカ」或ハ「患者数ハ主トシテ耕業ニ関係スルカ」等ヲ知ラント欲スルニ在リシナリ

患者月別表　（太陰暦ヲ用フ）

| 月 | 村名別 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 椎名原 | 名蔵 | 崎枝 | 川平 | 桴海 | 野底 | 伊原間 | 平久保 |
| 一月 | | | | | | | | |
| 二月 | 三 | | | | | | | |
| 三月 | 五 | | | | | | | 一 |

| 月 | 村名別 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 椎名原 | 名蔵 | 崎枝 | 川平 | 桴海 | 野底 | 伊原間 | 平久保 |
| 四月 | 六 | | | | | | | |
| 五月 | 四 | | | 四 | 一 | | | |
| 六月 | 一〇 | | 二 | 一〇 | 四 | 一 | | 五 |
| 七月 | 二一 | 二 | | 八 | 三 | 二 | 三 | 五 |
| 八月 | 二 | | | 七 | | | | |
| 総計 | 五一 | 三 | 二 | 三一 | 九 | 三 | 三 | 一一 |

| 月 | 村名別 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 安良 | 桃里 | 盛山 | 白保 | 宮良 | 大浜 | 真栄里 | 平得 |
| 一月 | | | | | | | | |
| 二月 | | | | | | | 一 | 一 |
| 三月 | | | 二 | | 一 | | | |
| 四月 | | | | | 二 | | | |
| 五月 | | | 一 | 二 | 一 | | | 一〇 |
| 六月 | 二 | 一 | 一 | 一 | 二 | | 二 | 二 |
| 七月 | 一 | 二 | | 四 | 五 | 八 | | 六 |

| 月 | 村名別 | 八月 | 総計 |
|---|---|---|---|
| | 安良 | | 三 |
| | 桃里 | | 三 |
| | 盛山 | | 二 |
| | 白保 | | 七 |
| | 宮良 | | 一一 |
| | 大浜 | | 八 |
| | 真栄里 | 二 | 五 |
| | 平得 | 三 | 二二 |

| 月 | 村名別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 四ケ村合計 | 一 | 二 | | 一 | 六 | 六 | 一二 | 八 | 五一 |
| | | 一 | 七 | 七 | 一二 | 三〇 | 四七 | 八二 | 二二 | 二〇〇 |

| 月 | 村名別 | 一月 |
|---|---|---|
| | 崎山 | |
| | 鹿川 | |
| | 網取 | |
| | 船浮 | |
| | 炭坑 | |
| | 成屋 | |
| | 祖納 | |
| | 干立 | 一 |

| 月 | 村名別 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 崎山 | | | | | 五 | 一 | | 六 |
| | 鹿川 | | | | | 一 | 三 | | 四 |
| | 網取 | | | | 二 | 九 | 四 | | 一五 |
| | 船浮 | | 一 | | 三 | 四 | 二 | 二 | 一二 |
| | 炭坑 | | 二 | | | 一 | 一 | 一 | 五 |
| | 成屋 | | | 一 | | | 二 | | 三 |
| | 祖納 | 一 | | 三 | 六 | 三一 | 二二 | 一 | 六四 |
| | 干立 | | | | | | | | 一 |

| 月 | 村名別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 浦内 | | | | | | 五 | 一 | | 四 |
| | 上原 | | | 一 | | | 一 | 一 | 二 | 八 |
| | 高那 | | | | 三 | 一 | 五 | 一 | | 一〇 |
| | 野原 | | | 一 | | | 一 | 一 | | 二 |
| | 古見 | | | 二 | | 一 | 六 | 七 | 一一 | 二七 |
| | 仲間 | | | | 一 | | 一 | | | 一 |
| | 南風見 | | 一 | | 三 | 六 | 三 | 五 | 二 | 一一 |
| | 合計 | 二 | 二 | 四 | 一〇 | 一三 | 七二 | 五一 | 一九 | 一七三 |

| 月 | 村名別 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 竹富島 | 黒島 | 新城島 | 小浜 | 鳩間島 | 与那国 | 合計 |
| 一月 | | | | | | | 二 |
| 二月 | | | | 一 | 二 | | 一 |
| 三月 | 二 | | 一 | | 一 | 二 | 六 |
| 四月 | 一 | 一 | 一 | 三 | 二 | 三 | 一一 |
| 五月 | 二 | 二 | 二 | 一 | | 四 | 一一 |
| 六月 | 三 | 二 | 二 | 九 | 三 | 六 | 二五 |
| 七月 | 七 | 三 | | 一〇 | 五 | 一一 | 三六 |
| 八月 | 一 | 一 | | 一 | | | 三 |
| 総計 | 一七 | 九 | 六 | 二六 | 一一 | 二六 | 九五 |

右ノ表ニ拠リ且ツ之ヲ先進諸氏ノ統計諸表並ニ沖縄県統計書等ニ参照シテ吾等ハ次ノ如ク約言シ得ルナリ

（一）病毒ノ発生ハ著シキ盛衰ヲ現ス

老、壮、幼及男性、女性ノ別ナク又村内ニアル者ト村外ニ出ツル者トヲ問ハス凡テ六、七、八月ノ交最モ多ク風土病ニ罹ル

（二）病毒発生ノ時期ハ各村ニ於テ殆同一ナリ

（三）患者数ハ主トシテ耕業ニ関係スト謂フヘカラス

六、七、八月ノ交ニ於テ耕作ニ従事スル者ト否トノ差別ナク風土病ヲ患フ

第三　八重山群島ニ於テ風土病ト称セラルヽモノハ如何ナル病症ナリヤ

所謂風土病ナルモノハ已ニ先進諸氏カ唱ヘタル如ク麻拉里亜症ナリ吾等カ斯ク看做ス所ノ理由ハ左ノ如シ

（一）患者カ風土病ニ感染スル模様ヲ熟察スルニ是ハ純粋ナル「ミヤスマ」性ナリ麻拉里亜モ亦然リ

（二）風土病ノ諸微候（同病ハ一定ノ時間ヲ隔テヽ発作性ニ起リ来ルコト、各発作ハ通常悪寒戦慄期、発熱期及脱汗解熱期ヲ有スルコト、著大ナル脾腫ノ生スルコト等）ハ従来吾人カ嘗テ成書ニ就キテ読ミ又師ニ随ヒテ聴キ且ツ実見シタル所ノ麻拉里亜諸微ト全ク相一致ス

（三）是ニ仮面性麻拉里亜症アリ彼ニ仮面性風土病アリ

（四）麻拉里亜ノ特効薬タル規尼涅ハ風土病及仮面性風土病ニ対シテモ亦同一ナル偉効ヲ顕ス

（五）麻拉里亜患者ノ血液中所謂麻拉里亜原虫（「フラスモーヂウム」）存ス、風土病患者ノ血液モ亦之ヲ含有ス

第四　有病地ト無病地トノ区別

若シ吾等カ「此地ヲ以テ有病地又彼地ヲ以テ無病地ト看做スノ理由如何」ノ質問ヲ提出スルトキハ通常他ヨリ唯

「古来ノ経験ニ拠ルノミ」或ハ「患者カ自ラ告クルコト此ノ如キノミ」ト謂フカ如キ極テ単簡ナル返答ヲ聞クニ過キサリシ玄ニ於テ吾等ハ此区別ヲ確ムルノ必要ヲ感シ次ノ簡條ニ注意シツ々之ニ従事セリ

（甲）其地ヲ以テ有病地ナリト仮定セン然ルトキハ此地ニ於テ必ス左ノ関係ヲ呈スルナラン

（一）此地ニ於テ生レタルモノニシテ未タ他ノ村境内ニ践入ラサル者或ハ他ノ地方ニ向ヒテ旅行シタルコトアラサル者即チ生来此地ニ於テノミ棲居シタル者カ夫ノ風土病ニ罹リタルノ実例アルヘキ事

（二）無病地ト看做サレ或ハ是ト確定セラレタル乙地方ヨリ此甲地方ニ移住シタル者モ亦同様タルヘキ事

（三）無病地ト看做サレ或ハ是ト確定セラレタル乙地方ヨリ他ノ所謂有病地ニ立寄ラスシテ甲地方ニ直航シ来レル者カ此甲地方ニ於テ忽チ風土病ニ罹リ或ハ玄ニ一定ノ時日ヲ経過シ再ヒ直航シテ乙地方ニ帰著シタル後同病ヲ患ヒタルノ実例アルヘキ事

（乙）無病地ハ全ク右（一、二、三）ト反対ナル関係ヲ現スヘシ

右ノ結果（但シ諸報告及住民ノ談話ヲモ参考シタリ）

（甲）有病地ノ部

（一）名蔵村、中川氏開墾場
（二）崎枝村
（三）川平村、仲筋村
（四）桴海村
（五）野底村
（六）伊原間村
（七）平久保村、安良村
（八）桃里村、葛氏開墾場
（九）盛山村
（十）椎名原開墾場
（十一）与那国島祖納村、島仲村（カ）、鬚川村
（十二）西表島祖納村、成屋村、船浮村、干立村
（十三）崎山村、鹿川村、網取村
（十四）浦内村、上原村、イン田
（十五）高那村、野原村、ヨナラ
（十六）古見村
（十七）仲間村
（十八）南風見村、サク田
（十九）小浜島

（乙）無病地ノ部（有病地ナリト謂フ確証ヲ発見シ能ハ

サリシモノ）

（一）白保村

（二）宮良村

（三）大浜村

（四）平得村、真栄里村

（五）四ヶ村（大川村、登野城村、石垣村、新川村）

（六）鳩間島

（七）新城島（上地及下地）

（八）黒島

（九）竹富島

附　記

次ニ記載スルモノハ此無病地ニ於テ多少「或ハ尚ホ少数ノ患者ヲ出スコトアリヤ」ノ疑訝ヲ惹起ス足ルモノナリ

（旧七月二十五日診）　●●●　●●●●●（●●）

（既往症）当村ニ生レ会テ他ノ地方ニ赴キタルコトナシト云フ

本年四月ヨリ六月末マテ毎日熱、二日越熱、三日越熱、ノ発作アリシ

（現症）脾腫カ左肋弓ヲ出ツルコト十一「サンチメートル」、実質固ク辺緑厚シ内緑ニ於テ一箇ノ深截痕存ス、濁音界ハ十八ト八「サンチメートル」ナリ

（旧八月二十三日診）　●●●　●●●●●（●●）

（既往症）生来極テ薄弱ナリ若シ咳嗽等ヲ患フルトキハ輙ク口唇粘膜、耳輪等ノ「チアノーゼ」ヲ呈シ容易ニ治セサルノ癖アリト云フ昨年七月頃感冒ニ罹リ頻ニ咳嗽ヲ発シ咯痰中時々血液ヲ混スルヲ見タリ其際熱候モ亦長時日ノ間持続シ殆ト死ニ瀕スルノ状ヲ呈シ父母ヲシテ大ニ気遣ハシメタリ本年七月二十日頃ヨリ一種ノ熱病ヲ患ヒタリ但シ患者ハ其以前他村ノ地（所謂風土病ノ発生地）ヲ践マス只一回母ニ伴レテ四ヶ村（是ハ旧来一般ニ無病ノ地ト看做サル吾等モ略々然ルヘキヲ信ス）ニ行キシコトアレトモ既日帰宅セリ同日朝九時頃患者ハ薦骨部ニ於テ疼痛ヲ覚エ忽ニシテ戦慄ヲ発シ次テ九時半頃高度ノ熱ヲ起シ午後二時頃ニ及ヒテ熱之ニ伴フ所ノ諸微自ラ緩解シタリ此時医某ノ治ヲ仰キ一回監酸規尼涅〇・三ヲ服用セリ是ヨリ隔日ニ発熱シ（必ス腰痛、戦慄ヲ以テ殆ト同時刻ニ始リ同時刻ニ終ル）五回之ヲ反復シ其後数回不定ノ微熱ヲ越シタルノミニテ治セリ八月二十二日午前母ハ児女カ悪シキ状貌ヲ呈シ默シテ訴ヘサルモ何トナク不快ヲ感シ倦怠ヲ覚ユルカ如クナルヲ視テ之ヲ寝所ニ伴フ患者ハ暫時ニ就ケリ十時頃患者ハ蓐中ニ在リ戦慄等ナクシテ卒然角弓状反張ヲ呈

シ忽チ人事不省ト為レリ（母ハ大ニ驚キ其他ノ徴候ニ向ヒテ注意ヲ加ヘサリシ）其後大凡十分ヲ許ヲ経テ醒覚シ同時ニ強度ノ熱ヲ起ス此熱ハ午後二時頃ニ至リテ自ラ退ケリ三時頃ヨリ患者ハ話笑シ且ツ平生ノ如ク食シ又上□シ終ニ戸外ニ出テ去レリ母之ヲ追従シタルニ患者ハ朋輩ノ許シニ赴キ嬉戯常ノ如クナリシト云フ（以上ハ患者ノ母某カ話ス所ヲ其僅書記セルモノナリ）

（現症）身長八八「サンチメートル」、胸囲四十八「サンチメートル」腹囲五十一「サンチメートル」、上膊十四「サンチメートル」、前膊十四「サンチメートル」、上腿二五・五「サンチメートル」、栄養不良、皮膚ノ色蝋白、眼瞼結膜、口唇粘膜等ノ色ハ極テ淡ナリ心尖拍動点ハ第五肋間乳腺ニ在リ心臓濁音界ハ上方第三肋間乃至第四肋骨上縁ヨリ始リ右方ハ胸骨正中線ヨリ少シク右方ノ部ニ達ス心尖第一音ハ著シキ雑調ヲ帯ヒ強ク吹キ或ハ摩擦スルカ如シ左側第二、第三肋間及胸骨右縁ニ於テモ亦之ヲ聴ク（雑音ノ心尖ニ於ケルモノト左側第二、第三肋間ニ於ケルモノトキハ殆ト同様ノ強サヲ有ス）肺動脈第二音ノ殊ニ強キヲ覚エス頸動脈ニ就キテ聴診ヲ試ミタルニ両音微ナレトモ清ナリ肝臓濁音界ハ上方第七肋骨上縁（カ）、下方肋弓下五・〇「サンチメートル」ノ所ナリ肝臓ノ辺縁ヲ触知シ得是ハ肋弓下六「サンチメートル」ノ処ニ在リ

（旧八月二十五日診）　●●●　●●●●（●●●●）

（既往症）当テ旅行シタルコトナシ近来腹痛アリテ時々熱ヲ起シ発汗ノ後快気ニ復スト云フ

（現症）左肋弓下於テ僅ニ（但シ確寅ニ）脾腫ヲ触知シ得タリ内地人（官吏ノ婦人）ニシテ他ノ地方ニ赴キタルコトナク唯四ヶ村ニ在ルノミニシテ風土病ニ罹リタル者アリト云フ

（旧八月十日診）　●●●　●●●●（●●●●）

（既往症）此島ニ生ル種痘善感、一昨年七月麻疹ヲ経過シタリ三歳ノ時始テ風土病ニ罹リ一箇月間毎日発熱ス最初ノ一日ハ戦慄アリキ此発病前他ノ地域就中インダ（是ハ西表島ノ上原村近囲ニ在リテ有名ナル病地ナリ鳩間島ノ住民ハ此所ニ水田ヲ有シ耕耘ノ時病毒ニ侵襲セラルヽヲ例トス）ニ伴ハレ行キシタルコトナシト云フ其際服薬シタリ次年ヨリ屢々風土病ヲ患ヒ七八歳以後ハ年々インダニ往来シタリト云フ本月モ三日間発熱シタリ其時熱ハ軽度ニシテ咳嗽アリ戦慄ヲ伴ハサリシ且ツ服薬セサリキ

（現症）身長一二九、胸囲六二、腹囲五九、上膊十六、

前膊十八、上腿三一、下腿二二「サンチメートル」、栄養善ナラス皮膚ノ色ハ比較的良ナリ眼瞼結膜、口唇粘膜ノ色常、心尖拍動点ハ左第四肋間乳背線部ニ在リ心音清脈百零四拍、肝臓濁音ノ上界ハ右第六肋骨ノ上縁ナリ、下界不明、左肋弓下部ニ就キテ僅ニ脾腫ヲ触知シ得、脾臓ノ濁音界ハ十一ト六「サンチメートル」ナリ

(旧八月十日診)　●●●●●●●●●●●●(●●)

(既往症)　当村生レ生後三四箇月ヨリ流行熱ニ罹レリ其後年々之ヲ患フ本年七月初頃ヨリ八日間同病ニ悩メリ戦慄ナクシテ毎日発熱ス咳嗽アリ頭痛ヲ訴ヘタリ

(現症)　脾臓ノ濁音界不明、脾腫ヲ触レス

(旧八月十日診)　●●●●●●●●●●●●(●●)

(既往症)　同胞三人アリ内一人ハ六歳ノ時風土病ニ罹リテ死亡セリ此死亡シタル小児ハ当村ニ生レ生後発病時マテ鳩間島以外ノ諸地ヲ践ミタルコトナシト云フ

(旧八月十六日診)　●●●●●●●●●●●●(●●)

(既往症)　当地ニ生ル患者ノ母ハ風土病ニ罹リタルコトナク又此児ヲ伴ヒテ有病地ニ赴キタルコトモナシト云フ本年七月初旬頃ヨリ大凡二十日間発熱ヲ患ヒタリ其際毎日朝七ッ時頃悪寒ヲ以テ発熱シ其夜五ッ時頃解熱セリ熱ノ熾ナル時嘔吐シ又其退キタル後下利スルコトアリシ右ノ熱症ハ全クさく田（西表島ノ山麓ニ在リテ当地人カ耕作ヲ営ム所ナリ而シテ其多数或ハ殆ト皆同地ノ風土病ニ罹ル）ノ熱病ト関係ナキヲ以テ之ヲ一種ノ流行熱ト看做シ居レリ

(現症)　体格、栄養共ニ中等、皮膚ハ汚穢淡黄色ナリ、心尖第一音軽雑、脈一〇〇拍、肝臓濁音ノ下界ハ右副胸腺ニ於テ肋弓下四「サンチメートル」ノ処ニ在リ脾腫ヲ左肋弓下就キテ僅ニ触知シ得、辺縁純ナラス、質軟、真濁音界ヲ明瞭ニ画定シ難シ

●●●、●●●●●●●（●●●●）ハ二十七年七月頃発作性熱病ヲ患ヒ崎山氏ノ処方規尼涅ニ由リテ頓挫セリト云フ右ノ老婦ハ生時ヨリ今日ニ至ルマテ此島以外ニ出タルコトナシト云フ

（未完）

《報告》

## 「ミーナライ・シキナライ」会のこと

阿佐伊孫良（竹富町史編集委員）

平成十七年の春、竹富島の喜宝院蒐集館に所蔵されている文書の一部が竹富町史編集委員会の『竹富町史』第十巻資料編「近代1－竹富島喜宝院蒐集館文書」として発刊された。

平成元年にスタートした我が町の町史編集委員会は、町民のための町史づくりを目指して、この十九年間に多くの「新聞集成」や「近代資料」、「戦争体験記録」など十集冊を刊行してきた。そして、いよいよ町史の本論というべき島々の歴史・文化の編集に取りかかろうとしたとき、国の三位一体の行財政の改革に迫られる。町史編集室は閉鎖され、編集者は総務課の編集係として他の業務も兼任するようになった。

しかし、島嶼群からなる島々の歴史・文化の編集は町民にとっては、何にも代え難いという行政当局の理解を得て、この四月、編集室は復活をみるに至った。これまでに刊行された「新聞集成」にしても「近代資料」などの刊行は、竹富町の島々の歩みとその変遷を明らかにしてくれたし、「近代資料」は、従来陽の目を見なかった自家版などの諸資料が誰でも平易に読めるように、古文書を翻刻し、意訳と解説を加えたものとして町民の前に姿を現している。

竹富島でいえば、崎山毅著『蟻蟻の斧』や上勢頭亨著『竹富島誌』、亀井秀一著『竹富島の歴史と民俗』、さらに大真太郎、辻弘などの貴重な著書、琉球大学や沖縄国際大学の調査報告書などを持ってはいるが、最近の刊行された諸資料を参考にしながら書き直しを迫られるであろうと私は考えている。

特に喜宝院蒐集館文書は一九〇三年（明治三六）の人頭税廃止前後の竹富島の姿を知るうえで貴重な資料を我々は手にした訳で、その喜びは大きなものがあった。早速、ＮＰＯたきどぅんの管理する「竹富島ビジターセンターゆがふ館」や「港湾ターミナルかりゆし館」で、販売しようと考えて大量に仕入れ販売している。これまでに四十冊ほどは売れているが、まだまだ満足できる状況ではない。

昨年のことだが、竹富島で行われた全国竹富島文化協会の講演会で、「島立て」に関する講話を拝聴した。そのとき、「島立て」とは、決して神代の神話の中にあるだけではなく、現在でも日常の暮らしの中に貫かれているということであった。日々、「島立て」の心意気で暮らさなければ、島は本来の魅力を失い、崩れてしまう。そのことに気付かなければならないと…。

それには、先人の知恵と工夫と努力を引き継ぐ謙虚さを失わないこと。新しい智恵も必要だが、それに頼りすぎないこと。新しい時代に相応しい地域づくりは、企業ビジネスではなく、コミュニティービジネス（地域共同

喜宝院蒐集館を建立し、来館者に展示品を説明する故・上勢頭亨氏

体的）でいくべきだ、それこそが地域の活性化を図る要因である、ということであった。

私はまさにその通りだと思った。従来は、竹富町の島々は行政の大きなバックアップを受けつつ、どちらかといえば、個々人の努力で今日の暮らしを築いてこられたし、それでよかったかも知れない。しかし、現在のように、観光客が増加するだけでなく、Ｉターン・Ｕターン組を含めて新住民が増え、我も我もと手っ取り早く利益を得て生活しようとすると、以前のような暮らし向きが一様ではなくなり、生活が多様化してくる。以前のように自然と溶け合い、島の暮らしがゆったりと流れていた時間が、すっかりと変化してしまった。日々、「島立て」の気概が必要となるゆえんである。

このような問題意識をもつＮＰＯ職員を中心に、昨年六月から、自主的な勉強会を始めた。「ミーナライ・シキナライ」の会がそれである。いえば、見て学び・聞いて学ぼうというものである。折しも、刊行されたばかりの竹富島の喜宝院蒐集館文書の一部が『竹富町史』第十巻資料編「近代１」が手元にあるではないか。それをしっかりとみんなで読むことから始めようと考えた。

まず、一九〇四年（明治三七）代の竹富島村事務所の「村日記」、その前後の書類、同様の「報告綴」や人頭税などの書類を読みながら、古老や先輩を訪ねて話を聞きながら学んでいこうと考えた。毎週火曜日の夜、余程のことがない限りは休まないことを原則としている。した

がって、例会はこれまでに三十四回に及んだ。会場は上勢頭家や阿佐伊家、最近では新装になった前与那国家を利用している。

特に明治二十年代から三十年代は、八重山にとってはもちろんだが、竹富島にとっても未曾有な激動の時代であった。廃藩置県から始まった世替わりは、村番所の廃止と役人の解職、学校や駐在巡査詰所の設置、土地整理と人頭税の廃止、壮丁検査と徴兵、殖産興業の勃興など当時の島人にとっては、予想だにしないことであった。特に注目したのは「村日記」である。約二年間にわたって竹富島の日々の出来事が克明に日記として記録されている。我々が無関心にさえなっている天候や風向きや降雨の模様が実に細かい。

また、島人の祭事行事にはほとんど関心を示さないが、明治国家の紀元節や明治節の新祝日が式次第を含め細かく記録されており、村頭（役人）の意図を読み取ることができる。それに、壮丁検査や日露戦争の凱旋軍人の帰島の模様、日露戦争の戦勝祝賀会並びにその行列の模様が手に取るように書かれている。

加えて、役人の往来の多さである。農家経済調査や土地私有権移転台帳の訂正など、あるいは軍事用牛の買い上げ、共有地の件、反布検査、煙草の植え付けなど連日のように役人の来島がある。人頭税が廃止された直後のことでいろいろ摩擦があったことが想像できる。

また、金城永本は村内の状況を視察し、ツカサを伴って御嶽の由来や史跡を調査している。その時の調査資料は残っていないだろうか。残っておれば参考になるのは疑いない。

資料の内容を細かく書いていけばきりがないが、まだまだ我々の知らないことの多さに驚いている。一年をかけて「村日記」を読み終え、「報告綴」の読み合わせに入っているが、本筋を離れて横道に入り、雑談などでなかなか進めないこともある。

本会への参加者は延べ四百人に達している。なかには竹富島に滞在する文化人（小林文人・東京学芸大学名誉教授）なども参加していろいろお話をしてくださる。

「ミーナライ・シキナライ」の会は、発会して一年が過ぎたにすぎない。喜宝院蒐集館文書を読み終えたら、次は「新聞集成Ⅰ～Ⅵ」を、さらに「石垣市史」の「豊川家文書」の草創期の竹富村資料や「マラリア資料集成」を読んでいくという壮大な？計画を立てている。

「町民のための町史」を目指して出発した竹富町史編集委員会だが、莫大な費用を投じ、すでに十数冊の基礎的な文献を刊行して我々の前に多くの資料を提供している。我々は、これをおおいに生かしていかなければならないと考えている。

多くの町民各位は諸資料を参考にしながら、過去の竹富町の島々の歩みを深く顧みて現在の島々のありようと、未来を展望する必要があるのではないか、と考えている。

# 収蔵図書紹介

## 受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申しあげます。

| 寄贈者御芳名 | 受贈図書名 | | | |
|---|---|---|---|---|
| ひめゆり平和祈念資料館 | ひめゆり平和祈念資料館資料集－ひめゆり学徒隊 | 沖縄県立図書館八重山分館 | とうもーる No.89 | |
| 佐敷町史編集委員会 | 佐敷町史第五巻　移民 | 沖縄県立芸術大学附属研究所 | 沖縄芸術の科学　第16号 | |
| 大富入植50周年記念誌編集委員会 | 大富開拓50周年記念誌－拓く和と力 | 琉球大学附属図書館 | びぶりお　第141号 | |
| 名護市立中央博物館 | 名護博物館紀要12　あじまあ | 岩田書院 | 地方史情報　No.66 | |
| 名護市立中央博物館 | 平成14年度ぶりでい子ども博物館 | 高野学院女子大学附属キリスト教文化研究所 | 沖縄研究ノート　第14号 | |
| 名護市立中央博物館 | 平成15年度ぶりでい子ども博物館 | 沖縄国際大学 | グロバリーゼーションの中の沖縄 | |
| 名護市立中央博物館 | 第19回企画展－沖縄のセメント瓦 | 沖縄国際大学 | 沖縄国際大学の歩み－創立30周年記念写真集 | |
| 名護市立中央博物館 | 第21回企画展－名護博物館20年の歩み歴史展 | 石垣市総務部市史編集課 | 石垣市史　八重山史料集4　豊川家文書Ⅲ | |
| 名護市立中央博物館 | 第20回企画展－沖縄の度量衡 | 石垣市総務部市史編集課 | 石垣市史叢書14富川親方八重山島規模帳 | |
| 名護市立中央博物館 | 館報第4号－がじゅまる | 西里喜行 | 清末中琉日関係史の研究 | |
| 竹富町教育委員会 | 平成16年度竹富町の教育 | 三木健 | 戦場の「べびー！」 | |
| | | 日本テレビ(株) | 瑠璃の島 | |
| | | 石垣市文化協会 | 創立十周年記念誌　あやぱに | |
| | | 読谷村史編集委員会 | 読谷の先人たち | |
| | | 沖縄県立図書館八重山分館 | 沖縄県立図書館八重山分館創立90周年のあゆみ | |

# 業務日誌

## ◆二〇〇六年（平成一八）

**四月三日（月）**
・町史編集室は総務課に統合され、町史編集係としてスタート。

**五月一〇日**
・竹富町史だより第28号編集に着手。

**五月一二日（金）**
・町史第八巻西表島編学習会、古見で開催。

**六月九日（金）**
・八重山地域史協議会二〇〇六年度総会、二〇〇五年度活動報告、会計報告、活動計画を承認、役員改選を行う。今後の組織の在り方について審議。

**六月一六日（金）**
・町史第五巻新城島編第四回専門部会、石垣市立図書館会議室で開催。収録すべき総項目等について審議。

**七月七日（金）**
・竹富町史編集委員会の登野原武委員長ほか、三委員が町史編集業務への専属職員配置等について、大盛武町長に口頭で要請。

**八月一一日（金）**
・沖縄県地域史協議会二〇〇六年度第一回研修会、沖縄市で開催。職員一人、一泊二日の日程で出張。

**八月一四日（月）**
・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）から「八重山の食料」「由布島・美原の移住誌」に関する資料提供。

**八月一七日（木）**
・金城　善氏（糸満市教育委員会）から戸籍に関する資料提供。

**八月二三日（水）**
・第十巻資料編「近代4」第一回小委員会開催。編集方法等について審議

・竹富町史編集委員会の登野原武委員長ほか、六委員が文書で大盛武町長に、町史編集業務への専属職員配置等について要請。

**八月二四日（木）**
・近藤健一郎氏（県立愛知大学教授）、「沖縄教育」の所蔵確認のため来課。

**八月三一日（木）**
・木長章氏（南山大学）、アカマタ・クロマタ行事について調査のため来課。

**一〇月三〇日（月）**
・第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」印刷製本指名競争入札実施。六業者参加。光文堂印刷株式会社が落札。

**一一月一三日（月）**
・世界文化遺産登録プロジェクトチーム発足。総務課職員一人メンバーに加わる。五人体制で作業を開始。

**一二月一一日（月）**
・旧町教育委員会（美崎町一六－六番地）庁舎改装点検。書棚等を確認。

**一二月二一日（木）**

・沖縄県埋蔵文化財センターの山本正昭専門員来課。船浮要塞調査結果資料を受贈。

**一二月二六日（火）**

・第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」入稿及び印字出力の受託業者・光文堂印刷株式会社への説明、県公文書館での資料収集のため、職員一人一泊二日の日程で出張。

**一二月二八日（木）**

・第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」、丸正印刷株式会社より納本。

・美崎運輸倉庫に所蔵の町史編集資料、旧教育委員会庁舎に移動。

## ◆二〇〇七年（平成一九）

**一月四日（木）**

・平良市史事務局が借用していた、町史所蔵の「琉球新報」マイクロフイルム複製本返却。

**一月一〇日（水）**

・第十巻資料編「近代3－新城村頭の日誌」発刊について、報道機関への記者会見。沖縄タイムス、八重山毎日新聞、八重山日報、石垣ケーブルテレビ四社が出席。

**一月一二日（金）**

・第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」解題執筆を第十巻資料編小委員会委員に依頼。

**一月一三日（土）**

・旧教育委員会庁舎を町史編集資料室として整理。一四日まで。

**一月一七日（水）**

・竹富町史だより第28号印刷製本請負契約、㈲八島印刷と締結し入稿。

**一月一九日（金）**

・平成十八年度委託販売店在庫確認調査票を各委託販売店に送付。

**一月二二日（月）**

・高村学人（東京都立大学助教授）氏、竹富、波照間の集落景観に関する資料収集のため来課。

**一月二三日（火）**

・第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」初校、光文堂印刷㈱より届く。

**一月二六日（金）**

・沖縄県地域史協議会二〇〇六年度第三回研修会、那覇市で開催。研修会に参加のため職員一人、一泊二日で出張。

**二月八日（木）**

・竹富町史だより第28号、㈲八島印刷より二三〇〇部納本。

**二月一七日（土）**

・第22回竹富町史編集委員会、町役場委員会室で開催。委嘱状交付並びに「近代4」等の編集要項を審議。十三名出席。委員会終了後、「近代3」出版祝賀会及び懇親会開催。

**二月一九日（月）**

・第22回竹富町史編集委員会会議録を作成。

**三月八日（木）**

・加賀谷真梨（お茶の水大学大学院）氏、本土から竹富町内への移住者に関する資料調査のため来課。

**三月一四日（水）**
・第八巻西表島編第二回専門部会、町史編集資料室で開催。五氏の全委員出席。調査総項目の決定及び各項目の執筆役割分担。

**三月一六日（金）**
・森裕亮（北九州市立大学法学部講師）氏、自治公民館に関する資料調査及び収集のため来課。

**四月二日（月）**
・町総務課町史編集係、美崎町一六－六番地（旧町教育委員会庁舎）で業務開始。職員一人専属配置。

**四月一一日（水）**
・総務課町史編集係の業務場所移転について、関係機関に移転通知文書を発送。

**四月一三日（金）**
・平成十九年度町史委託販売契約について、各販売店に契約書を送付。

**五月七日（月）**
・竹富町史だより第29号編集開始。

**五月二四日（木）**
・「慰霊の日特集」に向けて、船浮要塞に関する取材のため、沖縄映像センターの担当者来室。県埋蔵文化センターの伊波直樹氏も同行。琉球放送（RBC10チャンネル「ウチナー紀聞」で）六月一七日（日）に放映。

**六月八日（金）**
・中央研究院台湾史研究所　鍾淑敏副所長へ『竹富町史』十二冊を郵送寄贈（法政大学講師・大浜郁子氏の依頼）。

**六月一〇日（日）**
・第二巻竹富島編第四回専門部会開催。四氏全委員出席。本年度発刊に向けて取り組みを協議。役割分担を決める。

**六月一四日（木）**
・沖縄県地域史協議会二〇〇七年度第一回研修会、宜野座村で開催されるため、職員一人二泊三日の日程で出張。研修会は一五日、宜野座村中央公民館で開催。「近代4－官報にみる八重山」の編集について、請負業者の光文堂印刷㈱の担当者と協議。

**六月二〇日（水）**
・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）、八重山食文化研究会発足の報告のため来室。

**六月二一日（木）**
・沖縄高速印刷㈱の久場憲一氏、代表取締役社長に就任報告のため表敬来室。

**七月五日（木）**
・渥美徳太郎氏（写真家・九州産業大学大学院博士課程）、写真を中心にした黒島の歴史・文化の学位論文作成のため来室。

**七月六日（金）**
・第五巻新城島編第五回専門部会開催。五委員のうち、上江洲儀正委員欠席。総項目及び各項目ごとの役割分担を確認し、島の歴史、文化について論議。

**七月三〇日（火）**
・『竹富町史』十二冊、植松明石氏へ着払い贈呈。

# 竹富町史の刊行物

**1，『竹富町史』別巻２　竹富町関係文献目録　　平成２年度　関係機関へ配付**

竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC）に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学（社会科学一般、行財政、教育)、自然科学（自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業（産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。Ｂ５版ソフトカバー簡易製本　117ページ。

**2，『竹富町史』別巻３　写真集　ぱいぬしまじま　　平成４年度　　￥2,625**

明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。924枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。Ａ４版糸かがり上製本　319ページ。

**3，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅰ　　平成５年度　　￥2,100**

明治31年（1898）から大正７（1918）までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」(明治26年創刊)、「沖縄毎日新聞」(明治41創刊）の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特筆に値する。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　684ページ。

**4，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅱ　　平成６年度　　￥2,100**

大正６年（1917）７月から昭和８年（1933）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」(大正６年７月～同15年８月)、「八重山新報」(大正10年２月～昭和８年12月)、「先島朝日新聞」(昭和３年５月～同８年12月)、「八重山民報」(昭和７年１月～同８年12月）の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　724ページ

**5，『竹富町史』第十二巻資料編戦争体験記録　　平成７年度　　￥3,150**

アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　1,190ページ。

**6，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅲ　　平成８年度　　￥2,100**

昭和９年（1934）２月から同20年（1945）３月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」(昭和９年２月)、「先島朝日新聞」(昭和９月１月～同15年８月)、「八重山民報」(昭和９年１月～同11年６月)、「海南時報」(昭和10年８月～同20年３月)、「沖縄日報」(昭和11年11月～同15年10月)、「琉球新報」(昭和13年２月～同15年11月）六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の

古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A５版糸かがり上製本ケース入り　720ページ。

**7，『竹富町制施行50周年記念誌』ばいぬしまじま50　　平成10年度　　￥2,625**

昭和23年（1948）の町制施行から平成10年（1998）までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議会議長、町議議会議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目票も掲載してある。A４版糸かがり上製本　247ページ。

**8，『竹富町史』資料集①　鉄田義司日記　　平成11年度　　￥1,575**

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉（後に中尉・大尉）鉄田義司が残した戦時中に書き残した個人的な陣中日記。彼は昭和16年（1941）、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに昭和20年（1945）敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A５版ソフトカバー簡易製本　519ページ。

**9，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅳ　　平成12年度　　￥2,100**

昭和22年（1947）１月から同30年（1955）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」(昭和22年１月～同30年12月)、「八重山タイムス」(昭和22年１月～同30年12月)、「南西新報」(昭和22年９月～同28年10月)、「自由民報」(昭和23年７月～同29年１月)、「南琉日日新聞」(後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年３月～同30年12月)、「八重山新報」(昭和30年４月～同10月）の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A５版糸かがり上製本ケース入り842ページ。

**10，『竹富町史』第十巻資料編近代２　　平成13年度　　￥2,625**

南嶋民俗資料館（石垣市字大川）が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館（西原町千原）が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は明治30年に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしぶりが髣髴ながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、明治29年（1896）から同40年（1907）までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。A５版糸かがり上製本ケース入り348ページ。

**11，『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅴ　　平成14年度　　￥2,100**

昭和31年（1956）１月から同35年（1960）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「海南時報」(昭和31年１月～同34年４月)、「八重山タイムス」(昭和31年１月同～35年12月)、「八重山毎日新聞」(昭和31年１月～同35年12月)、「八重山新報」(昭和

31年１月～同33年３月）の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　843ページ。

**12,　『竹富町史』第十一巻資料編新聞集成Ⅵ　　平成15年度　　￥2,100**

昭和36年（1961）１月から同39年７月での間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」(昭和36年１月～同39年７月)、「八重山毎日新聞」(昭和36年１月～同39年７月)、「八重山朝日新聞」(昭和37年１月～同39年７月）の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　947ページ。

**13,　『竹富町史』第十巻資料編近代１　　平成16年度　　￥2,625**

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代１」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記－明治37年以降」、「間切島会ニ関スル書類－自明治31年至仝37年・自明治37年至」、「報告綴－明治37年」、「人頭税領収証綴－自明治31年至明治35年」、「契約及金銭物品ニ関スル諸証書－自明治31年至仝36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これらの一部は写真に収め口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り　546ページ。

**14,　『竹富町史』第十巻資料編近代３　　平成17年度　　￥2,625**

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ、明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日誌」の副題を付け、「近代３」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は明治30年（1897）から明治36年（1903）まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年日誌宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月　至仝十二月　日誌宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかわる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日誌だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。Ａ５版糸かがり上製本ケース入り600ページ。

**15,　『竹富町史』第十巻資料編　近代４　　平成18年度　　￥2,625**

沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関わる『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年（明治16）７月２日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間に関わる広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで充分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の一側面が浮かび上がってくる。Ａ５版　糸かがり上製本　ケース入り　659ページ。

※竹富町史の刊行物は、竹富町内の主だった観光施設および石垣市・那覇市・宜野湾市の委託販売契約店での販売のほか、町役場での直販も承っております。送付希望の場合は、宅配業者にお願いし販売代金のほか、着払い料金が請求されます。詳細については竹富町役場総務課町史編集係（電話0980－88－7220）までお問い合わせください。

# 編集後記

◆『竹富町史だより』第29号を発刊しました。本号は、史料紹介として、「官報掲載八重山関係資料」は前号と同様だが、新たに阿佐伊孫良氏（町史編集委員）から提供のあった東京人類学会報告第十三号（明治二〇年二月刊）所収の「沖縄県武富島歴見奇事」を載せました。論考はS・Sのイニシャルしかないため執筆者は不明です。内容は私見に満ちているとはいえ、興味深いものがあります。その他に、『竹富町史』第十巻資料編「近代4」発刊の紹介記事、「写真にみるわが町」での「祖納集落の脱穀光景」、「聖地めぐり」の「喜屋武御嶽」、「文化財探訪」の「大平井戸」を取り上げました。

◆今号に初めて報告記事を掲載しました。「ミーナライ・シキナライ」会のこと、と題した記事がそれです。同会は、手始めに町史編集委員会が先に刊行した『竹富町史』第十巻資料編「近代1―竹富島喜宝院蒐集館文書」をテキストにして、本書を読み合わせながら竹富島の歴史・文化を学ぼう、という意欲的な同好会です。竹富町が発刊した町史を、このような形で利活用されることは編集者の冥利に尽きます。

（通事）

平成19年9月28日発行

竹富町史だより

第29号

編集発行　竹富町役場

沖縄県石垣市美崎町11番地

☎0980－82－6191